

〔図書紹介〕

鈴木文治 著

『障害を抱きしめて—もう一つの生き方の原理インクルージョン—』

え じま なお とし
江 島 尚 俊

著者は、日本基督教団桜本教会牧師、インクルージョン教育の先駆および実践者、田園調布学園大学教授ほか、多方面での顔を持っている。また、著者の活動は多領域にわたっており、ここでは書き尽くせないほどの功績を残してきた人物でもある。評者は、本学(田園調布学園大学)において著者とのご縁を4年ほど前にいただいたが、著者の活動の幅に驚くとともに、思惟と信念の深さに敬服してきた1人でもある。

その著者は、「はじめに」で本書についてこのように告白している。「本書は、これまで私なりに障害と障害者と共に生き、共に問うてきたことの延長線上にあり、そのささやかな報告である。」(p.8)。著者の人柄がうかがえる静かな物言いであるが、本書は「ささやかな報告」では決してない。本書には著者の人生、価値、そして信仰をかけたこれまでの活動および思索に関する重厚な記述がなされている。

それでは通例にしたがひ、まずは目次および各章の要約を記しておくこととしたい。

【目次】

はじめに インクルージョンとは何か

I 障害を生きる

第一章 仲間になるということ

第二章 障害とは何か

第三章 障害者の信仰

II 共に生き、包み込む——インクルーシブな生き方の根拠

第四章 イエスと障害者

第五章 悪とは何か、障害とは何か

あとがき

第I部では、障害概念および障害者をめぐっての著者の体験、社会の変化、そしてキリスト教会の現状について、実に豊富な事例を挙げながら語られている。

第一章は、著者がこれまで接してきた数多くの障害者・信徒のうち9名との出会いや出来事を述懐することから始められる。そこには、障害ゆえに社会的排除の対象となり、過酷な現実を生き抜いてきた人たちが登場する。長年の教会活動・支援活動から紡ぎ出される体験談は我々読者を圧倒するが、その著者は自身の体験を踏まえてこう述べる。「その人が自分を最も表出しやすい環境をつくることこそが、共に生きる原点となる。それは本人を変えるのではなく、私たちが彼らのために変わることなのだ。桜本教会にはそれがある。」(p.67)。障害とともに排除をも生き抜いてきた彼らが桜本教会において「仲間」になってゆく、一般常識という世俗的価値において仲間になるのではなく、神の前において「仲間」になっていく。それを間近に実体験してきた著者は、そこで得た確信をこのように述べている。「一緒に生きる仲間としての関係性が、特別な配慮が必要な人という特別視を払拭する。これこそが、インクルーシブ・チャーチである。一人ひとりの課題を見ないで、一人ひとりを仲間として受け止める。これが、共生の教会の姿である。」(p.68)と。

第二章は、著者がまさに命をかけて問い、そして対峙してきた障害に対し、考察を深めている章である。ただし、本章でいう障害とは、言語が扱えない、目が見えない、といった実際上の障害ではなく、障害とはどのように捉えられてきたのかという障害観に焦点が当てられている。ゆえに本章では、教育や福祉、医学などの領域において障害に関する定義が如何に異なるのか、障害をめぐっての国際的定義がどのように変化していたのか、さらには、ノーマライゼーションからインクルージョンへの歴史的展開がどのような意義を持つものだったのか、について述べられている。おそらく読者は、本章を読めば読むほど「障害とは何か?」ということを改めて考えさせられるだろう。領域ごと、地域ごと、時代ごと。障害をめぐるコンテクストが変化すれば、何をもって障害とするかという基準も変化することを評者は改めて学ぶことができた。著者は明言してはいないが、本章の真の目的は読者が抱いている(そして、おそらく固定化されているであろう)障害観を揺さぶることではないかと評者は邪推する。それほど、障害の捉え方は多様だったのであり、多様なのである。と、はいうものの、障害を障害として定義・認識しなければ支援の対象として浮上してこない。そこで著者は逆転の発想に立つ。障害の定義を個々人に見出すのではなく、それを取り巻く社会に求めることを提起する。著者によると障害の定義とは「その人が生きられやすい環境設定が、図られていない状態にあること。すなわち、ある人が社会で生きていく上で、社会の側に十分な準備ができていないこと」。つまり、社会の中に障害者が存在するのではなく、その個々人が障害者として生きなければならない社会にこそ欠陥が存在している、と宣言するのである。換言すれば、ある人が障害者と認定された時、それはその人に障害が認められるからではなく、その人を障害者として

認めなければならない社会の方に障害があるのだ、ということを著者は主張するのであった。

第三章からは、いよいよ著者の信仰論、神学論が展開されていく。この章は第I部の最後にあたるものの、むしろ内容としては第II部に繋がっていく重要な内容(そして、評者にとっては最も関心のある内容)を多く含んでいる。さて、この章は、キリスト教にとって最重要のトピックおよび実践である信仰に焦点が当てられている。というのも「障害者は本当に信仰を持ってないのか?」、この問いが著者の根底に横たわりつづけてきたからである。著者はこれまで「障害者に信仰はない」(p.115)と主張する牧師や神父、一般のキリスト教信徒たちに数多く出会い、そして、信仰を明言できない者は教会から排除されてきた事実を目の当たりにしてきた、と述懐する。評者が推察するに、そこでの体験は著者の究極的な実存に関わる重大な、かつ危機的な体験でもあったろう。なぜなら、実は著者自身も言語障害・視覚障害をいだきながらこの世を生きてきた人間だからである(「はじめに」参照)。もし、「障害者に信仰はない」という論理を受け入れてしまえば、著者はキリスト者たり得ないことになってしまう。“私は本当に信仰を抱くことが叶わないのだろうか?”おそらくこの問いは著者の人生に大きく、そしてふ厚く覆いかぶさってきた実存をかけた問いであったろう。それとともに、“なぜ教会は障害者を排除するのだろうか?”という問いも、心の奥底に抱き続けてきたことだろう。そこで著者は、障害概念の歴史的推移をたどるとともに、現教会が抱いている障害者に対する眼差しが、聖書の記述とは大きく異なっていることを論証していく。それはまさに聖書を、障害者の視点からインクルージョン的に読み直すという作業であった。この作業については、第II部で更に深められていくこととなる。

第II部では、I部の記述を踏まえながら、インクルージョンの視点から聖書を読み解くことを通して障害概念の転換を企図し、新たな障害観を提示するという極めて興味深い論旨が展開されている。

まず第四章では、聖書に記述されているイエスの言行をインクルージョンの視点から読み直すことで、健常者／障害者という二項対立を超えられることを論じている。著者によると、古代ユダヤ教社会において障害者は排除の対象であった。それは旧約聖書のなかに如実に現れており「障害とは、罪に対する罰として神が与えるもの」(p.164)として描かれている。しかし、著者は断言する。「神の国の福音が真っ先に届けられるのは、障害者、病人、貧困者、異邦人、罪人など、この時代の社会でも普通の人たちからは敬遠され、差別されていた人々」(p.166)であり、イエスはそれを説き、そして実践した、と。著者は、イエスの言行にも福音書のなかにも、すでにインクルージョンの理念が見出されることを主張する。第三章では、既存の教会が言語的信仰論を重視してきたため、信仰を言語化できない障害者は排除されてきたことが論じられていたが、聖書をインクルージョンの視点から読み直すと、そのような排除は根底から間違っていることを筆者は強く断じている。

そしていよいよ第五章では、インクルージョンの視点に基づきながら著者独自の神義論が展開さ

れるが、そこでは、現代社会の根幹の1つをなしている個人主義へ警鐘を鳴らすとともに、健常者／健常者の二項対立をこえる新たな障害観念が提示されている。筆者は問う。我々人間という存在は多くの現代人が考えているように、本当に個々で生きることのできる存在なのか、と。近代思想では、理性的で何ものにも依存しない独立した個人を模範として掲げてきたが、その模範に対し著者は真っ向から立ち向かう。近代思想が目指してきた模範像は実は幻想でしかなく、かつ、その幻想が障害者への差別意識を醸造する基盤となってきた、と厳しく批判するのであった。著者は、人間という存在が如何に脆弱な存在であり、不完全な存在であるか、そして、決して1人では生きることのできない存在であるということを、ジャン・バニエ『人間になる』や寺園喜基『障害者イエス』、K・ブラック『癒やしの説教学』を用いながら例示する。そして最後には、自身の主著『インクルーシブ神学への道』でも述べている「排除しない」神学的理念を提示する。そこでは、従来型の二項対立(健常者／障害者)を超えて、「すべての人が障害者」(p.229)として認識を改めることで「不寛容で排他的であり、境界線を引いて外側の人々を排除する現在の社会」(p.233)の変革が強く主張されているのであった。

以上が本書の要約である。本書の文体は決してかたくはなく、教育学や神学の初学者である評者でも読み進めることができた。しかし、そこでの内容は実に重い。障害に対する価値の転換とそれに伴う実践の重要性が明に暗に読者に問いかけられているがゆえである。

ここで著者がこれまで刊行してきた単著を一覧として並べてみよう。

- 2001年 『学校は変わる：切り捨てのない教育』青木書店
- 2006年 『インクルージョンをめざす教育』明石書店
- 2006年 『幸いなるかな、悲しむ者』キリスト新聞社出版事業部
- 2009年 『ウガンダに咲く花』コイノニア社
- 2010年 『排除する学校：特別支援学校の児童生徒の急増が意味するもの』明石書店
- 2012年 『ホームレス障害者：彼らを路上に追いやるもの』日本評論社
- 2015年 『閉め出さない学校：すべてのニーズを包摂する教育へ』日本評論社
- 2016年 『インクルーシブ神学への道：開かれた教会のために』新教出版社
- 2017年 『肢体不自由児者の合理的配慮に基づく：インクルーシブ教育ってどんなこと(療育ハンドブック43集)』全国心身障害児福祉財団
- 2018年 『障害を抱きしめて：もう一つの生き方の原理インクルーシブ』ぷねうま舎

上記のように並べてみるだけでも、著者が「排除される側」に如何に寄り添ってきたのかが理解できる。教育でも、福祉でも、医療でも、社会の至るところに排除は存在してきたし、現に存在している。それは評者自身も首肯せざるを得ない事実である。田園調布学園大学では多くの卒業生

を福祉、教育、保育などの領域に輩出しているが、おそらく彼らもそれぞれの現場において、さまざまに排除の現実を目の当たりにしていることだろう。排除する側に立つのか、排除される側に寄り添うのか。難しい選択を迫られたこともあったに違いない。その際(特に、排除される側に寄り添おうとする際)に自身が拠って立つべき価値、信念を如何にして抱くことができるのか、評者も自問せざるを得ない問いである。

「すべての人が障害者」。これが、著者がたどり着いた地平である。著者は、それをイエスの言行と重ね合わせる。宗教学者としての評者から付言させてもらえば、イスラームでの預言者ムハンマドも、完全なる平等とは神の前においてのみ成立するという地平を提示した。仏教の開祖釈迦は、年齢・出自・富貴などの差異を問わず、あらゆる人間は必ず苦しむという意味での平等性を説いた。特定の視点から物事を捉えようとすると必ずそこには欠落(=不平等)が生じる。普遍的なもの、漏れがないもの、隔たりを持たないもの。それを、究極的な根源といっても良いし、原初の基準といっても良い。そのような地平においてこそ初めて区分が消失し、真の意味での平等がその地平からスタートしていく。「すべての人が障害者」とは、著者にとっての地平であり、真の意味でのスタートラインであろうと評者は考えている。

「すべての人は障害者」。本書は、障害およびそれに伴って生じる差別や偏見に苦しむ人のみならず、自身は障害者ではないと自認している人々にこそ是非とも手にとってもらいたい一書である。

(田園調布学園大学人間福祉学部心理福祉学科講師 江島尚俊)